

東南アジア・オセアニアにおける小規模漁業と資源利用

秋道智彌*

Marine Resource Use and Its Transformation in Small-Scale Fisheries in Southeast Asia and Oceania

Tomoya AKIMICHI*

Summary

Three case studies of small-scale fisheries in Indonesia and Solomon Islands are examined in terms of marine resource management.

In the Moluccas of eastern Indonesia, customary practices to control access to resources are generally known as *sasi* in which harvest of selected coastal and land resources are subject to particular regulations. The function and history of *sasi* are diverse. For instance, *sasi lola* (trochus shell) spread extensively throughout the Moluccas in the mid 1970's when economic demand for the shell necessitated control over its harvest while *sasi lompa* (sardine-like fish) is found only on Haruku Island and its origin may be traced back several hundred years.

In northeast Malaita of the Solomon Islands, the Lau people living on man-made coral islets are known as expert fishermen who employ nearly a hundred fishing techniques. Extensive barrier reefs are mostly owned by particular individuals or lineages. Fish resources are either locally consumed or exchanged for shell money or taro when requested by hill tribes of the mainland. While fish-freight networks between rural fishing villages and the town of Honiara, which began around the late 1970's, have urged the people to earn more income than before, they have also brought about over-exploitation and a failure to observe reef tenure and other traditional customs.

In the Riau Islands of western Indonesia, the Malays and the Orang Laut have utilized reef and mangrove resources for subsistence as well as commercial purposes. Since the 1970's, export of live groupers has become one of the promising business in the archipelago. In Indonesia, fish-pens for live fish located throughout the country are organized by Chinese and Buginese trading networks. While the export of live fish to Singapore and Hong Kong is increasing, grouper stocks may be threatened due to over-exploitation.

These three cases clearly show that resource use in small-scale fisheries of Southeast Asia and Oceania is diversified and rapidly changing. Therefore, comparative studies of indigenous models of the sustainable resource use are recommended.

東南アジア島嶼部からオセアニアにいたる熱帯海域では、沿岸の水産資源を利用する小規模な漁業が営まれていた。インドネシア（1991-95年）とソロモン諸島（1975, 1990年）における調査から、熱帯海域の沿岸小規模漁業が現在かかえている問題を3つの事例から報告したい。

熱帯の小規模漁業

東南アジア・オセアニアの熱帯沿岸域では、サンゴ礁やマングローブ域における多種類の生物を対象として多様な漁具・漁法を駆使した小規模漁業が営まれているのが特徴である。とくに熱帯の

*国立民族学博物館, National Museum of Ethnology, Senri Expo Park 10-1, Suita, Osaka, 565.

沿岸域は、生物の多様性が顕著に観察される海域であり、それらの多様な生物を利用した小規模漁業の研究に重要な対象となっている。

経済的な観点から小規模漁業をみると、個人操業から家族あるいは小集団（おおくても10人－20人程度）による操業形態、機械化・動力化の程度の低い漁具・漁法の採用、手漕ぎのくり船から通常5トン級までの小型漁船の使用、資本蓄積の低い経営、低生産高と低所得などをその特徴としてあげることができる。

一方、漁撈活動に注目すると、熱帯沿岸における小規模漁業では漁場の利用や漁獲物の分配・利

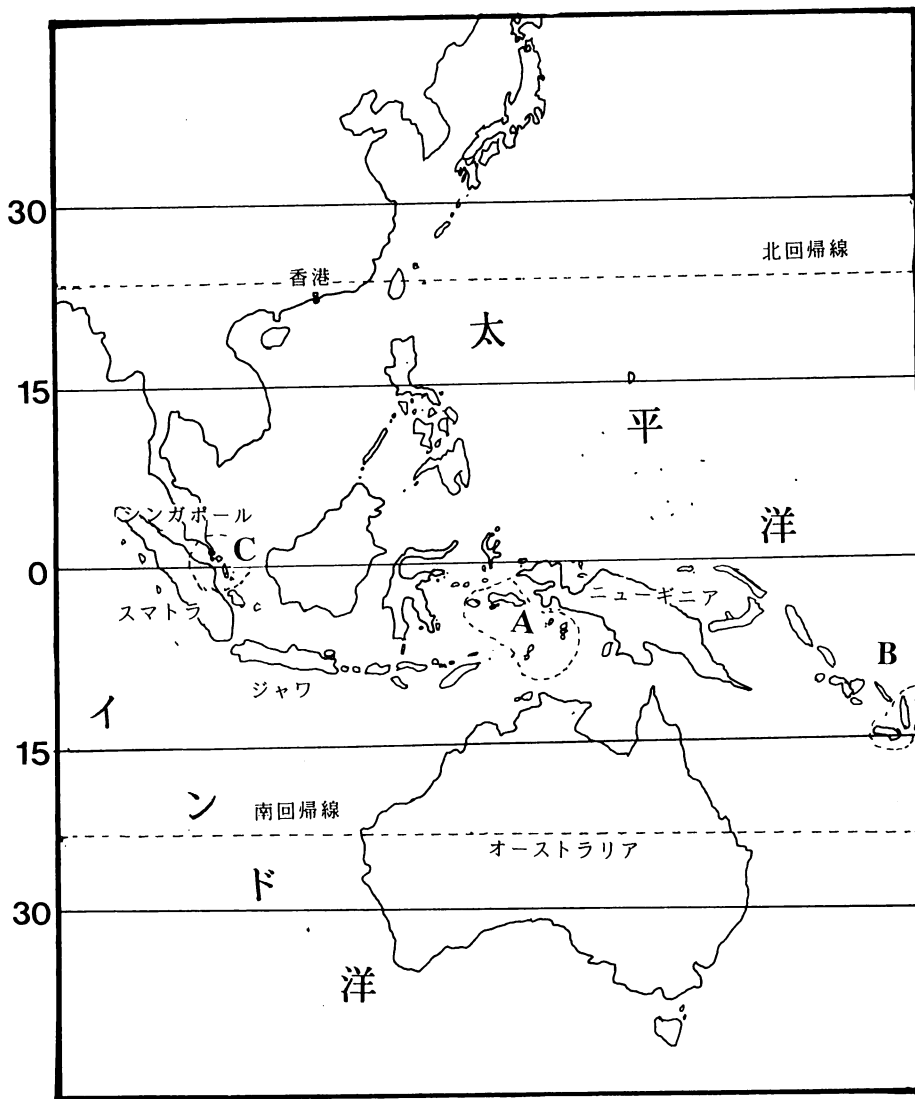


図1 東南アジア・オセアニア地域と熱帯小規模漁業の調査地
A モルッカ諸島 B マライタ島 C リアウ諸島

用方法などをめぐって地域独自のさまざまな慣習や規制が存在する場合が多い（秋道，1995b）。とくに、サンゴ礁海域における漁場の所有権や禁漁期・禁漁区が詳細にきめられている事例が報告されている（JOHANNES, 1978; RUDDLE and AKIMICHI, 1984; RUDDLE and JOHANNES, 1985）。漁撈活動自体が単なる経済的な営みであるという以上に、社会的、宗教的な意義をになっているという指摘もなされている（秋道，1995a）。

以上の特徴にくわえて、小規模漁業によって漁獲された水産資源は、その種類により自給用の食料から地域の市場あるいは国際市場に流通する商品にいたるまで多面的に利用される。資源が道具・装飾品・財貨などの非食用目的に利用される場合も、やはりその種類によってさまざまな利用形態が存在する。この点は、小規模な漁業のもつ複合的な性格をよくあらわしているといえる（秋道，1995c）。

以上のような熱帯における小規模漁業にみられる特徴は、東南アジア島嶼部からオセアニアにいたる地域のなかでひろくみられるとは一般的にいえても、個々の地域における状況はけっしておなじではない。まして時代や歴史的な変化を通じてそれぞれの地域における小規模漁業はさまざまな変容を遂げてきたのであり、比較研究が重要な視座をあたえるものとおもわれる。

とくに、本稿では、1. インドネシア東部モルッカ諸島、2. ソロモン諸島マライタ島北東部、3. インドネシア西部リアウ諸島という3地域の事例から（図1）、熱帯の小規模漁業が現在かかえる問題について紹介し、1970年代を契機として資源の利用上、大きな変化が生じてきた点を指摘してみたい。

なお事例として取り上げるインドネシアとソロモン諸島における資料は、おもに文部省科学研究費補助金（海外学術調査）による調査に基づいている（課題番号02041102「熱帯アジア・西南太平洋地域における水産資源利用の文化適応とその戦略」平成2－4年度、課題番号06041127「東南アジア島嶼部における環境利用とその現代的変容」平成6－7年度）。

1. インドネシア東部・モルッカ諸島の伝統的資源管理

モルッカ諸島は、インドネシア東部にあり行政的にはマルク州として統括される。セラム、ハルマヘラ、バチャン、アンボン、テルナーテ、カヨア、ケイ、アルーなど大小の島じまをふくむ。16世紀以来、香料貿易の中心地として栄えたことでよく知られている。これらの島じまのうち、アンボン、セラム、ハルク、サパルア、ケイ、アルーなどの島じまでは、沿岸の資源利用を村落単位で規制するサシ（*sasi*）とよばれる慣行が営まれてきた。

調査によると、サシの対象としてナマコ、高瀬貝、夜光貝、真珠貝などのサンゴ礁海域におけるベントス資源の多いのが特徴である。これらの資源は住民の重要な収入源であり、勝手に資源を採捕することは村単位で禁止されている。これをサシ・トゥトゥップ、*sasi tutup*と称する。トゥトゥップは「閉じる」ことをさすインドネシア語である。そして、毎年あるいは数年に1回、サシが解禁になる。これをサシ・ブカ、*sasi buka*と称する。ブカは「開く」ことを意味する。サシの解禁と

閉鎖時期については、村の会議できめられる。ただし、ケイ諸島の調査によると、サシの解禁にはさらに行政の長であるチャマツトから許可をもらう必要があった (AKIMICHI, 1995)。

サシは資源を共同体で管理して利用する慣習として世界的な注目を集めている (BAILEY and ZERNER, 1992)。しかし、伝統的な慣習に基づき、しかもケワン (*Kewang*) とよばれる慣習的な組織を通じてサシを執行する地域はむしろ少ない (KISSAYA, 1993)。キリスト教化した住民はサシ・グレジャ (*sasi gereja*) として、いったん解禁して採捕した資源をまとめて売り、その資金を教会の建設、道路の整備、学校の改修などの村落のなかでも公共性の強い事業用に使う。グレジャは「教会」の意味である。あるいは個人の取り分と公共用の取り分についての比率をきめたり、漁場を分割して日ごとに順番に採捕する場合がある。村ごとにサシの役割や社会的な意義は明らかに多様化しているといえる。

このような規制は、社会的な平等や集団のまとまりを保持する上で有意義のように見える。しかし同時に、沿岸の資源を持続的に利用することも実現されてきたといえるだろうか。そして、インドネシア東部のサシは生態学的な資源管理と社会的な統合や平準化に一定の有効性をもつ制度であるということができるだろうか。

この問題を考える場合、サシの対象について検討しておこう。というのは、サシの対象となる資源はサンゴ礁のベントス資源だけではないからである。たとえば、ケイ諸島のある村では、沿岸域に回遊してくるアジが対象とされている。アンボン島の東側にあるハルク島では1年に一度、沿岸域から河川を溯上するイワシの一種がやはりサシの対象とされている (KISSAYA, 1993)。つまり、回遊性の魚類もまたサシの対象とされるわけである。

しかも水産資源だけではない。陸上のココヤシ、サゴヤシ、カナリウムの木などの樹木栽培植物や、アルー諸島におけるように極楽鳥や海燕の巣もサシの対象とされる。これらの資源もふくめて、すべてサシの適用をうけるからおなじ機能を担っていると考えることには無理がある。

これまでの調査からは、サシが村全体におよぼされる場合や、個人にたいして適用される場合があり、村によってサシの対象とされる資源の種類も異なることがわかっている。イワシやアジは自給用か地元消費用である。ハルクにおけるサシの解禁をめぐる儀礼の存在から、回遊性の魚類にたいするサシがもっとも古くから存在したと考えられる。魚の回遊にあわせておこなわれた儀礼的ないとなみがサシの原型である可能性は高い。一方、ココヤシやサゴヤシのような陸上資源にたいするサシは、オランダ植民地時代におけるチョウジやナツメグなどの生産調整となんらかのかかわりがあるものと指摘されている (BAILEY and ZERNER, 1992)。さらに、ナマコは数百年前からの輸出用資源であるが、プラスチックにかわる貝ボタンの原料として高瀬貝の世界的な需要が高まるのは1970年代のことである。とくにサシの解禁をめぐる村落間の紛争が頻発するのは高瀬貝の採捕をめぐることであった。

このように、モルッカ諸島でおこなわれているサシは歴史的に変容してきたものであり、重層的な意義をもつ。したがって、資源の伝統的な管理という場合に対象とその適用範囲や機能について

個別にとらえるとともに、全体としてどのような役割があるのかをあわせて考慮する必要がある。

2. ソロモン諸島マライタ島の漁場利用とその変化

ソロモン諸島マライタ島の北東部にはラウ・ラグーンと呼ばれるバリアリーフがある。ラグーンのなかにサンゴ石灰岩を積んだ人工島には、ラウとよばれる漁撈民が居住している。ラウの人びとは陸上にほとんど耕作地をもたないので、漁獲物をマライタ島に居住する農耕民に売り、見返りとしてタロイモ、サツマイモ、ヤムイモなどの主食や野菜などの食料を入手することを通じて生活を維持してきた。

ラウの人びとは、広大なラグーンを中心に合計で96におよぶ漁法を駆使した漁撈活動をおこなう。重要なことはラグーン海域の主要な部分が特定の個人や出自をおなじくする集団によって所有されており、その利用が規制されている点である（秋道，1975）。つまりふつうは所有海域は閉鎖されており、大量に魚が入用な場合にかぎって解禁される。たとえば、祖先崇拜儀礼や葬式のなおい用に大量の魚が必要となる、あるいは農耕民が教会の完成にともなう儀式と祝宴を催すさいなどの場合に、農耕民の側からラウの漁撈民に魚を調達してくれるようにとの依頼がなされることがある。そのさいに、魚の尾数に相当する貝貨が交換財として用いられる。10連つなぎの貝製ビーズ1.5m分は、小型のブダイで100尾、カツオで50尾、大型のサカタザメで1尾にそれぞれ相当する（AKIMICHI, 1992）。

一方、ラグーンのなかでいつでも利用できる自由海域がある。この海域は藻場と砂地からなる浅瀬であり、籐製の長いロープによって海面を叩いて草食性のアイゴやペラを脅かしてヤスで突いてとる漁法がおこなわれる。外洋とラグーンの外縁部の深みはおなじく自由海域とされている。

ラグーンを特定の集団が所有して、その利用を規制する慣習はオセアニアではふつうにみられる。ラウの場合、禁止海域には木の棒を立てて標示することがある。私の調査したミクロネシアのカロリン諸島にあるサタワル島でも、島の資源利用を首長が規制する慣習がおこなわれており、その場合にココヤシの若葉を木にくくりつけたり、木の棒を海面に立てて、立ち入りを禁止する慣習がおこなわれていた。1. で述べたインドネシア東部のモルッカ諸島でもココヤシの若葉をもちいて資源利用の禁止を標示する同様な慣習がみられる。

こうして、ラウの人びとの漁場利用に関する慣習は資源の無原則的な利用を規制するとともに、交換を通じて農耕民との相互関係を維持するうえできわめて重要な社会的・文化的な役割を果たしてきたといえる。

ところが1978年の独立を契機として、沿岸域に近代化の波が押し寄せてきた。そのなかでも、国の側からは沿岸漁業の振興と生活改善のための援助の一環として保冷库の無償供与、マライタ島から都市部のガダルカナル島への鮮魚流通機構の開発が促進されるようになった。また、1980年代から90年代にかけて高瀬貝やナマコなどにとって売するための商業的な漁業がガダルカナル島の中国系商人によって開始された。こうした一連の動きのなかで、ラウの人びとによる漁場利用のあり方が

大きく変貌するようになる。

たとえば、ふだんは閉鎖されている漁場が高瀬貝の採集のために数日間、解禁され、所有者に獲得した貝の一部を贈与し、のこりを現金獲得のために利用することがおこなわれた (AKIMICHI, 1992)。従来、禁止されていた電灯による夜間の突き漁が自由海域でおこなわれ、産卵期にあるアイゴが大量に捕獲され、冷蔵されて都市部へと輸送されるようになった。同様に、所有海域においても、随時、解禁にして追い込み網漁をおこない、捕獲されたサンゴ礁魚類が冷蔵されてガダルカナル島へと輸送されるようになった。つまり、従来、農耕民との交換や重要な儀礼のさいに解禁されてきた漁場が現金獲得のために利用されるようになり、鮮魚流通という経済的な目的に特化する変化がみられるようになった。また、ナマコを採集して売るために、島中の人びとがこぞってナマコ漁を始め、得た現金で米やかんづめを購入する変化も一部で見られた。

こうした変化が近代化にともなって生じたことは明らかであるが、資源利用だけでなく慣習のもつ意味の崩壊と生活時間や集団関係の変質など、影響はきわめて重大で多方面におよんでいることが指摘できる。漁場利用をめぐる新たな規制や人びとの対応が今後とも注目されることである。

3. インドネシア西部リアウ諸島

インドネシア西部のスマトラ島とマレー半島に囲まれた海域には、バタム、ピンタンなどをはじめとしたリアウ諸島がある。この諸島には、マレー人を中心とした多くの漁村集落がある。なかには、オラン・ラウトあるいはスク・ラウトとよばれるかつての漂海民も居住している。

比較的穏やかな海域でマングローブや泥質地帯が発達しており、沿岸部では釣り漁やケーロンとよばれるえり型の定置網漁がさかんにおこなわれている。

一方、この地域は19世紀以降、国際貿易港として発展したシンガポールという大消費地を控えている。リアウ諸島において漁獲された魚介類は、地元消費のほかはより高価格で売れるシンガポールへと輸送される。

鮮魚としては周辺の島じまの漁船によってはえなわ、刺し網、ケーロンなどによって漁獲されたものが運ばれるが、なかには生簀で飼育されたのちに活魚として輸送されるようになった。しかも活魚は、シンガポールだけでなく、シンガポール在住の華人を通じてシンガポール経由で香港まで運ばれていた。

とくに1970年代中葉以降になると、香港の華人とインドネシア在住の華人とのあいだの契約を通じて活魚が輸送されるようになった。その中心対象となる魚種がハタ (Epinephelidae) である。なかでも、サラサハタやナポレオン・フィッシュと一般に称される大型のメガネモチノウオ (*Cheilinus undulatus*) はもっとも価格の高い魚であり、中華料理の食材として珍重される。これらの魚はもともと釣り漁や釜漁によって捕獲され、数カ月間、生簀で飼育される。

現在では、こうした生簀をもつ基地がインドネシア各地に点在しており、香港からの輸送船が各地をまわって活魚を回収するシステムが確立している。たとえば、バンカ、ピリトン、カリマンタ

ン周辺、スラウェシ島南部および中部周辺の島じまには活魚を飼育するいくつもの生簀があり、それぞれの地域で漁業に従事する集団や生簀を管理する人びとがいる。

しかも、活魚の集荷と輸送にはやはり華人のネットワークが大きくかかわっている。なかでも、潮州系の華人が西インドネシア、シンガポール、そして香港における流通機構のなかできわめて重要な位置を占めている。

ハタを生かしたまま捕獲するために特別の方法が用いられているようであり、しかもハタはサンゴ礁の代表的な単独生活者である。乱獲による資源枯渇が懸念される。現にメガネモチノウオは、インドネシアから輸出禁止の措置がとられている。

活魚の市場は香港を中心とした海鮮レストランにあるとおもわれるが、ハタだけにかぎらず、貝類、カニ、エビなどを生かしたままレストランで売ることによって付加価値を高めることがおこなわれている。香港以外でもいわゆる活け物の需要の高まりがあり、一方では資源利用と流通のあり方に大きな影響をあたえていると考えてよい。

中国向けの輸出水産物としては、これまでナマコ、フカひれ、海燕の巣などのほかに、クラゲ、タツノオトシゴ、貝柱などがしられている。これらの資源はいずれも小規模な漁業を通じて採捕されてきたのが特徴である。しかも、これらの水産物の採捕には、バジャウ、ブギス、ブトン、マカッサルなどの諸集団が関与していることもしられている。とくにバジャウの人びとはサンゴ礁海域における小規模な漁業に従事して商品価値の高い水産物を獲得し、ブギス人や華人の商人に売ることを通じて生活を維持してきた。かれらの資源利用の戦略が数百年間まったくおなじであるとか、ある時点からどのように変容してきたのかということを示す実証的な資料はないが、ハタやベラをめぐる資源利用の動向を今後とも追跡してみる必要はおおいにあるとおもわれる。

討論にかえて—水産資源利用とその変容

インドネシアの東部における伝統的な資源管理方法であるサシ、ソロモン諸島におけるサンゴ礁海域の利用とその変容、大消費地を控えた都市型漁業のネットワークに組み込まれたリアウ諸島の漁業についての事例を紹介してきた。事例の相互の比較から以下の2点を重要な問題として提起したい。

1. 1970年代の転換期

サンゴ礁海域の水産資源が多様な種類からなっていることとともに、その資源を利用する目的や流通のネットワークも多面的であることがわかった。

3つの地域を大局的にみると、1970年代後半以降、それぞれの地域における資源利用のあり方が大きな変化を遂げてきたといえるのではないだろうか。サシの適用されるインドネシア東部海域で高瀬貝の需要が高まったことはインドネシアだけの問題ではない。東南アジアからオセアニア各地でも、高瀬貝の需要増大にともなう捕獲圧はこの時期に高まったと考えてもさしつかえない。

ソロモン諸島の独立と近代化の推進が1970年代の終盤にはじまったのは歴史的な事実ではあるが、1970年代は1973年の国連第3次海洋法会議以降、200海里問題や地球環境問題が大きくかたられだす時期であり、海の問題が世界的な規模で注目される時代に相当する。香港やシンガポールにおける活魚需要の増大も、やはり1970年代中盤以降のことであり、なんらかの時代的な背景との関連を想定することができる。

1970年代から約15年を経過した現在、資源の適正利用が世界的に叫ばれている。これまでとりあげた漁業自体はたいへん小規模である半面、漁獲強度が加わることによって乱獲をもたらす可能性のあることが指摘できる。とくにベントス資源の場合、捕獲圧の増大は容易に乱獲をもたらすことがある。しかも、近代化や世界経済に組み込まれるなかで、人びとがどのような対応をしめしてきたのかは地域によって異なっている。資源の状態も悪化する方向や改善される方向に向かう場合とさまざまである。

すくなくとも、地元における多様な対応を注意深く追跡することなしに、世界経済的な枠組や近代化にともなう変化の問題を議論することはできない。地域ごとの多様な対応に目を配る必要が今後ともありそうである。

2. 民俗的な管理の問題

東南アジアとオセアニアにおける小規模漁業では、サンゴ礁の資源がなんの規制や条件もなく利用されてきたわけではないことが、インドネシアとソロモン諸島における慣習的な漁場利用のしきりから明らかになった。

ただしそうしたしきりや規制は、時代にかかわらず長い間存続してきたわけではけっしてない。周囲の海域においてほとんど見向きもされなかった資源に商品価値があることがわかってはじめて所有権やなわばり争いが浮上したり、住民の資源利用に関する意識が高揚する場合もある。たとえば、ソロモン諸島では、高瀬貝の商品価値がわかってから、所有権が曖昧であった海域に他地域からの入漁があり、そのことが海の境界を明確にきめる動きへと変化したことが報告されている(BAINES, 1985)。私の調査したラウの場合でも、ナマコはほとんど食料として利用されることのない資源であるが、商品価値があることがしられるようになって、住民はこぞってナマコ漁に参加し、ふだん利用が禁止されている海域においてもナマコ漁をはじめたり、ナマコの種類や大きさにかかわらず採捕するという乱獲型の活動がおこなわれた。もともと理想的な資源利用の方法や詳細な所有形態があったわけではかならずしもないのである。

こうした点は、将来における持続的な資源利用や管理方法を地域の伝統的なモデルに求めようとする意見に若干の再認識をせまるものである。

もちろん、上からの開発や資源管理の方法が現場を無視しておこなわれることにたいする反動と批判からの現場のモデル重視がさげればはじめた経緯がある。その点からすると、民俗的な管理の問題(秋道, 1995a)は今後とも重要な問題として慎重に検討する必要があるという指摘をしてお

きたい。

文 献

- 秋道智彌 1975. 漁撈活動と魚の生態. 季刊人類学, 7 (2) : 78-128. [AKIMICHI, T. 1975. The fishing and the ecology of fish. *Kikanzinruigaku*, 7(2) : 78-128.]
- 秋道智彌 1995a. なわばりの文化史. 256頁, 小学館, 東京. [AKIMICHI, T. 1995a. *Culture History of the Territoriality*. 256pp., Shogakkan, Tokyo.]
- 秋道智彌 (編) 1995b. イルカとナマコと海人たち. 248頁, 日本放送出版協会, 東京. [AKIMICHI, T. 1995b. (ed.) *Dolphin, Sea-Cucumber and the Maritime Peoples*. 248pp., NHK publ. Co., Tokyo.]
- 秋道智彌 1995c. 海洋民族学. 272頁, 東京大学出版会, 東京. [AKIMICHI, T. 1995c. *Maritime Peoples of the Pacific*. 272pp., University of Tokyo Press, Tokyo.]
- AKIMICHI, T. 1992. Sea tenure and its transformation in the Lau of north Malaita, Solomon Islands. *South Pac. Stu.*, 12 : 7-22.
- AKIMICHI, T. 1995. Indigenous resource management and sustainable development: Case studies from Papua New Guinea and Indonesia, *Anthropol. Sci.*, 103 (4) : 321-328.
- BAILEY, C. and ZERNER, C. 1992. Community-based fisheries management institutions in Indonesia. *Maritime Anthropol. Stu.*, 5 (1) : 1-17.
- BAINES, G. B. K. 1985. A traditional base for inshore fisheries development in the Solomon Islands. In: *The Traditional Knowledge and Management of Coastal Systems in Asia and the Pacific*. (Eds. RUDDLE, K. and JOHANNES, R. E.), 39-52, UNESCO Regional Office for Sci. and Technol. for Southeast Asia, Jakarta.
- JOHANNES, R. E. 1978. Traditional marine conservation methods in Oceania and their demise. *Annu. Rev. of Ecol. Syst.*, 9 : 349-364.
- KISSAYA, E. 1993. *Sasi Aman Haruku-Ukui*. 44pp., Yayasan Sejati, Jakarta.
- RUDDLE K. and AKIMICHI, T. (eds.) 1984. *Maritime institutions in the western Pacific*. Senri Ethnol. Stu. No. 17, 340pp. Nat. Mus. of Ethnol., Osaka.
- RUDDLE K. and JOHANNES, R. E. (eds.) 1985. *The Traditional Knowledge and Management of Coastal Systems in Asia and the Pacific*. 320pp., UNESCO Regional Office for Sci. and Technol. for Southeast Asia, Jakarta.